

GAO 通信 第9号

51年8月5日発信 新田 尚

6月から7月にかけて続いた干天も解消して、天気が変わりやすくなりましたが、今夏は世界的に天気の問題が豊富だったようです。さて、第8信をお送りしてから早くも3カ月が過ぎ、その間に先信で予告しましたように、GARPの今後とFGGEの全体の枠組みを決定するような一連の大きな会議が開かれました。まず5月末から6月上旬にかけてWMO第28回執行委員会、つづいて6月下旬にJOC第12回会議、そして7月下旬にFGGE政府間パネルがそれぞれ開かれました。WMOの執行委員会では、現時点で可能な世界各国のFGGEに対する財政的・機械的貢献の吟味が総括的に行なわれ、特にどういふ観測体系が今なお多くの貢献を必要としているか検討されました。その中でも最も財政的困難にあったConstant Level Balloon(定高度気球)計画のなりゆきが注目されましたが、救済の見通しが立たないことが判明し、結局、この計画は放棄せざるを得ないことになりました。これはFGGEの観測計画にとっては極めて重大なことで、JOCに対して観測体系のlevel downがFGGE全体に及ぼす影響の評価を早急に行なうよう要請されました。また、その他にも財政的・機械的援助が必要な部分がありますので、WMOの中に臨時にFGGEのためのFundがつくられました。このような現状をうけて、JOCはその対策を検討し、また観測体系のさまざまな展開の仕方に応じた実験成果を推定しました。この作業は今後もつづけられますが、FGGEの中心目的の達成のために基本的には従来計画していたレベルをまもることが確認され、実施の母体であるWMOとICSUに一層の努力を要請しています。それと同時に、FGGE実施時点で予想される観測体系の実態をつかむことも並行してつづけることになりました。JOCは今回メンバーの一部が入れかわり、新しいchairmanのSmagorinsky博士の下、FGGEの実施にむけていくつかのBoardを設置しましたが、詳しくはJOCメンバーで今回の会議に出席された東大の岸保さんの報告があるものと予想されますので、このぐらいにしておきます。FGGE政府間パネルでは、執行委員会とJOCの勧告に基づき、更に深く問題点の掘り下げを行ないまし

た。詳しくは日本の委員である気象研究所の須田さんの報告にゆずりたいと思いますが、個々の観測体系について、既に着手されている部分、未着手の部分、予想される費用など詳細な検討がなされました。紙面の都合でここにそれらを紹介できませんが、いずれ機会を改めて、FGGE時に展開される観測網とそのデータを用いた研究計画について報告したいと思います。われわれは目下如何にして可能な限りの最大規模と最良値のデータを入手するかに全力をそそいでいますが、いう迄もなくGARPの成果はそれらのデータを用いた研究の成否にかかっているからです。FGGE政府間パネルの席上、ICSUを代表したMalone博士もこの点を強調していました。

さて、以上の全体的な動きの下に、さまざまな技術レベルの仕事やサブ・プログラムの計画がすすめられています。

数値実験計画の作業委員会では、今後必要となってくる気候力学面(特に海洋モデル)と熱帯気象学面を強化するため、イギリスのA.E. Gill博士とアメリカのT.N. Krishnamurti博士にそれぞれの分野を中心とした活躍を期待して新委員になってもらうべくお願いしています。また、ソ連のZilitinkevitch博士が辞め、代りにSadokov博士が委員に就任しました。10月にカナダのモントリオールで第14期委員会を開く予定ですが、予想されるFGGE観測体系の展開に応じたデータの精度、利用価値を調べるためのOSSEや数値予報精度を評価する方法の改良、更には気候力学サブ・プログラムのための世界中の気候モデルの相互比較などを行なっています。

FGGEの実施時における技術面をしっかりとかためるための一連の技術レベルの会議がこれから秋にかけて開かれますので、リストアップしておきます。データ処理関係(10月、ジュネーブ)、熱帯地方の観測船の配置(11月、モスコウ)、JOCのBoard(気候研究、12月、ストックホルム; Level III-bデータの評価、12月、ブラックネル; FGGE, 77年1月)、GATE関係と予定されています。

(497ページへつづく)

で、この点の改善を今後望みたい。ちなみに、筆者が1975年分の集誌を受け取った実際のおくれは、平均48日（最小16～最大74日）に対し、船便による JAS では平均36日（23～50日）であった。

(C)講演会

講演企画委員会が毎回要望するように、予稿集には研究の方法と得られた結果を書く。そうすれば大会出席者が討論内容を前もって準備できる。特に最近の如く講演時間が短くなると尚更である。したがって講演会だけのための、間に合わせの報告は次回にまわすべきである。

講演会場を現在より多くするのはよくない。以前のよりに2会場制がよい。講演会では、いろいろの専門分野の人々が最近の情報を交換し合い、現時点における気象学全体の進行方向を雰囲気として捉むと同時に、他専門の人とも討論し、お互いの学問水準を高め、新分野を開拓して行く事に意義がある。専門のちがう者同志であるから、理解できるまでには時間がかかるので、講演時間

は15分、討論時間も15分程度がよい。そのためには全体の講演数を減らさざるを得ない。前述したように、皆が論文を仕上げる事に重点を置くよう、方向転換すれば上の事は実現可能ではなからうか。（筆者の主張は講演をやめると云うのではなくて、講演だけで終るのは良くないと云う事である。）

また講演会はここで云う堅い意味の目的もあるが、一方、年に1～2回、同好者が集まり話をする親睦的な意義も大切であるから、気やすく報告できる部分があってもよい。それでC氏の提案にあったように講演を2つに分け、一例として、午前中は full paper、午後はその他の講演と云う事も考えられる。また、その際に、大会は東京で年に1回だけ開き、更に数個の分科会を合併した地区大会を年に1回だけ行なう方式もある。

大会を意義あるものにするために、これまで講演企画委員会が実行してきた、いくつかの試みを支持し、更に今後も改革が推進される事を望みたい。

(498ページのつづき)

サブ・プログラムについては、先づ先の JOC で山越え気候 (Air Flow over and around Mountains) が正式に GARP のサブ・プログラムのひとつとして認められました。先信でも書いたように、field experiment (FGGE の後に実施) としてはアルプス地方を選んでいます。問題意識としては大規模山岳系の影響や室内実験も考慮に入れて、このサブ・プログラムの計画をすすめていくように JOC は勧告しています。モンスーン関係では西アフリカ・モンスーン研究実験計画 (WAMEX) が JOC によって認められ、よりしっかりした計画案をつくることになりました。パネルでは更に実施にむけて、第1回 WAMEX 計画会議を11月末に開くことが決められました。一方 MONEX の方は、計画案がほぼまとまり、77年2～3月に予定している第3回計画会議

で具体案を決める予定です。1977年にソ連とインドが中心になって実施する“Monsoon-77”実験は、予定通り行なわれることになり、5月下旬スリランカ(セイロン)のコロンボで計画会議が開かれ具体的観測案が決められました。ソ連からの4～5隻の観測船とインドの2隻の観測船が中心で、ポリゴンを形成しながらアラビア海とベンガル湾を移動したり定着したりしながら観測しようというものです。POLEX の方も5月にモントリオールで計画会議を開き、FGGE 期間中の観測実施が決められましたが、FGGE に寄与していく形ですすめていくように JOC は要請しています。更に、POLEX のデータは、気候力学の研究との関連でも利用していく必要性が強調されています。では又。